

道徳の授業の充実に向けて

福島 睦恵

1 はじめに

平成27年3月27日に学習指導要領の一部改正あり、昭和33年に新設された「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（道徳科）として、中学校では平成31年度から検定教科書を使用して実施されることになった。

この機会に、本学の「道徳教育論」の履修生及びA町の中学校教員へのアンケート調査等から、道徳の授業の充実に向けての課題を考えてみたい。

2 道徳教育推進状況調査から

平成20年に文部科学省が行った道徳教育推進状況調査によると、道徳教育の全体計画を作成している中学校は93.2%、また「道徳の時間」の年間指導計画を作成している中学校は98.0%であり、ほとんどの中学校で作成されていた。

さらに、中学校における「道徳の時間」の授業時数（平成19年度実績）は全国平均35.0単位時間で標準授業時数と同じであり、平成14年度実績の33.6単位時間より1.4単位時間増加している。

因みに、平成24年の道徳教育実施状況調査でも中学校の「道徳の時間」の授業時数（平成23年度実績）は全国平均35.1単位時間であり標準授業時数を満たしている。

このことから、全国の各中学校では道徳教育の全体計画に基づき、道徳教育の「要」である

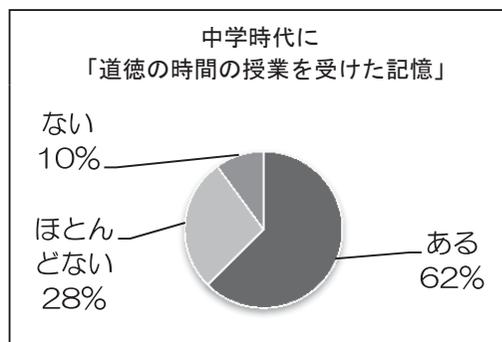
「道徳の時間」の年間指導計画に沿って、年間35単位時間（平均）の道徳の授業が行われていたことが理解できる。

3 「道徳教育論」履修生への調査から

一方、上記文部科学省の調査が実施された前後に中学生時代を過ごした、本学の「道徳教育論」の履修生76人に「道徳の時間」の授業についてアンケート調査を実施（平成27年4月8日及び9月23日）した結果、次のとおりであった。

中学時代に「道徳の時間」の授業を受けた記憶がありますか。

- ① ある 62%
- ② ほとんどない 28%
- ③ ない 10%



「ある」と答えた履修生に「道徳の時間」の授業はどのようなものであったかを具体的に記述してもらった内容（抜粋）は、

- ・人と人との関わり方や命について教科書の中の話や映像などを使って周りの人と考えていくこと。
- ・教科書を読んで人と付き合うことはどういうことなのか、また自分の行動を客観的に観察して他人から自分はどう思われているのかをディスカッションした。ビデオを見て命の大切さなどを学んだ。
- ・ある物語を題に心情や人への思いやりなどを自分だったらどう考えるか。
- ・他人や家族など他の人のことを考える授業。人権についてのこと。特に弱い立場にある人のことを考える授業。
- ・人間関係の問題について、クラスで話し合った。
- ・人との関係や自分の心についての授業だったと思います。
- ・相手とのコミュニケーションの取り方や、友達との関わり方、人種差別や男女の差など、またユニバーサルデザインについても学んだ。
- ・相手の立場になった時の考え方や思いやりの気持ちを学んだ。
- ・他人の気持ちについて、他人が不快に思う言動などを発した時、相手がどのような気持ちになるか。
- ・このような言葉を言うと人は喜ぶ、悲しむ、傷つく(チクチク言葉)など、人がどう思うか、思わせてしまうか、どう感じるか、感じさせるかを考える授業。
- ・様々な場面に出くわした時に「あなたならどう思う」という点を中心に考える授業。(例: クラスメイトが集団でいじめられている時、助けるか見てないことにしてそのままにするかなど)
- ・いじめについてみんなで意見を交換しながら考える授業。
- ・数人ずつのグループになって「なぜいじめはよくないのか」について話し合った。グループごとに発表したものをクラスでまとめた。
- ・社会で生きていく上で必要なモラルというも

のを学んだことが印象的です。

- ・他の科目では学ぶことのできないような人の心の成長について触れる授業が多かった。いじめについてや思いやりについて、自分自身で考え他の人の意見も取り入れて自分自身を成長させる授業だった。
- ・バスや電車など社会でのマナーやいじめの問題について教科書をもとに話し合ったりした。解決案の出し合いや確認。等に見られるように、「道徳の時間」に、自他の生命の尊重や法やきまりの意義の理解を深めること、人間関係の理解に関することや相手の立場にたって考えることの大切さ、そして他の教科では学ぶことのできないような人の心の成長や自分自身で考え他の人の意見も取り入れて自分自身を成長させる授業であった等、充実した「道徳の時間」の授業を受けた記憶のある履修生が数多くいた。

反面、

- ・「心のノート」というテキストを用いて、その中にある文章を読んで自分ならどうするかなどを考えた。当時の自分にとって教わるのが自分の中で当たり前のことばかりだった。
- ・教科書があり、それをもとに先生が話を進めていき、生徒が意見を述べる。
- ・副読本を読み、読んだテーマについてグループワークで意見を出し、まとめる。
- ・道徳用の教科書を使って毎回一つの話を読みその話に沿って感想を書いたり意見を言ったりした。登場人物の言動について、どう思ったのか考えたりした。
- ・先生が一つの物語を選んで、先生または生徒が音読し、教科書の設問について考え、それに対する意見を述べた。
- ・教科書を使い、体験談のようなもの(同じくらいの年齢の子)を読んで、簡単な感想を書く。何人か発表し、先生が簡単にまとめる。
- ・本を読んで意見を述べたりする。社会のルールや物事の意識の捉え方についても学んだ。等のように、生徒にとって分かりきった内容

の授業であったり、副読本（道徳の教科書と記述している学生が多かった）や資料等を読み、意見を述べ合い感想を書いたり、先生がまとめをしたりという、所謂「読み物道徳」といわれる授業も多くあったことが理解できる。

次に、「道徳の時間」の授業を受けた記憶が「ほとんどない」・「ない」と答えた履修生が記述した理由（抜粋）は以下のものであった。

- ・道徳の代わりに「宗教」の授業がありました。
 - ・ミッションスクールであったため「聖書」という科目に代替されていた。のように、「宗教」や「聖書」の時間で代替していた学校はともかくとして
 - ・詳しく覚えていなくて「心のノート」という本を使って授業をしていたことだけ覚えている。
 - ・中学の時の授業の記憶があまりない。
 - ・あまり印象的な授業を受けた覚えがない。授業を受けたのかどうか記憶がほとんどない。
 - ・中学時代あまり道徳の時間が時間割になかった気がします。あまり覚えてない。
 - ・影響に残るような授業がなかった。
 - ・部活、勉強、友達と遊んだこと、文化祭や体育祭などの学校行事などを覚えているが道徳の授業でどのようなことをしたかなどほとんど覚えていない。
 - ・話し合いなどをした記憶があるが、内容は覚えていない。等にあるように、「道徳の時間」の授業は受けたが、記憶に残るような授業が行われてはいなかった。
- さらに、
- ・具体的に何かをしたという記憶がない。度々「総合」の時間としてつぶれた時もある。（イベント等の準備のため）
 - ・毎回席替えや行事の準備にあてられた。
 - ・小学校ではやった記憶があるが、中学校ではあまり記憶に残っていない。おそらく道徳の時間という意識はなく、その時間に体育祭の練習をしていた。

- ・正直中学校時代に道徳の授業を受けた記憶がほとんどない。道徳という授業があったかどうかも分からない。覚えていないということは、やっていないか私が聞き流していたのかもしれない。もしくは総合が道徳であった。
- ・カリキュラム的に受験に使う科目を多くしたからではないでしょうか。
- ・道徳の授業は確かにあったとは思いますが、学級活動や集会、その他行事への準備などでつぶれることが多かったです。担任が道徳の授業を行っていましたが、テスト前などは、担任が担当している科目で道徳がつぶれることがありました。等、文化祭や体育祭等の学校行事の準備や練習に充てられたり、他の教科の時間に充てられるなどして、「道徳の時間」が十分に確保できていなかった実態が見えてきた。

このような実態はある程度予想されたことではあったが、中学時代に「道徳の時間」の記憶が「ほとんどない」、「ない」と答えた履修生が38%もあり、生徒の側から見た「道徳の時間」の内容や実態と前述の文部科学省の調査結果にある「道徳の時間」の授業時数の実績に大きな温度差があることが実感できる。

道徳の授業を充実するためには、まずは各学校での「道徳の時間」の授業時数の確保が大きな課題であることは当然のこととして、一人ひとりの教員が副読本を読んで感想を書いたりするというだけの授業から、生徒の心に残る道徳の授業を目指していくように、授業のあり方を改善していくことも重要な課題であると考えられる。

4 中学校教員の意識調査から

道徳の授業の充実に向けて、A町のB中学校とC中学校の教員49人にアンケート調査を実施（平成27年9月28日～30日）した結果は以下のとおりであった。

道徳の授業を充実させるために、どのようなことが必要だと考えますか。(複数回答可)

- | | |
|-------------|-----|
| ① 教科書の活用 | 15人 |
| ② 効果的な指導方法 | 45人 |
| ③ 地域や保護者の協力 | 23人 |
| ④ 指導時間の確保 | 17人 |
| ⑤ その他 | 10人 |

■道徳の授業を充実させるために必要なこと



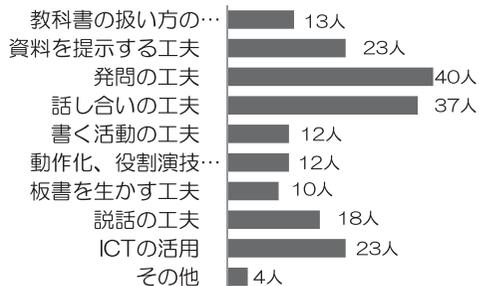
当然のことと言えるが、効果的な指導方法をあげた教員が多数いた。また、道徳の授業の充実や道徳性の育成には家庭や地域の人々の理解、連携協力を得ることの必要性を感じている教員も多くいた。

②を選んだ方、効果的な指導を行うために、心掛けていきたいことは何ですか。(複数回答可)

- | | |
|--------------------|-----|
| ① 教科書の扱い方の工夫 | 13人 |
| ② 資料を提示する工夫 | 23人 |
| ③ 発問の工夫 | 40人 |
| ④ 話し合いの工夫 | 37人 |
| ⑤ 書く活動の工夫 | 12人 |
| ⑥ 動作化、役割演技等表現活動の工夫 | 12人 |
| ⑦ 板書を生かす工夫 | 10人 |
| ⑧ 説話の工夫 | 18人 |
| ⑨ ICTの利用 | 23人 |
| ⑩ その他 | 4人 |

多くの教員が心掛けていきたいこととしてあげた発問の工夫は教員にとって古くて新しい課題であり、道徳の授業を充実させるために、常に検討を重ねていかなければならない課題であると考えられる。

■効果的な指導を行うために心掛けていきたいこと



また、話し合いの工夫をあげた教員も多くいたが、生徒一人ひとりが考え議論し、互いの考えを認め合い深め合っていく道徳の授業を目指していくためにも大切な課題であると言える。これら発問の工夫や話し合いの工夫は、授業研究等を通して実践的に研究を重ねていくことが求められる。

さらに、読み物資料の重要性を認識しつつも、改正された「道徳科」が求める、考え議論する道徳、問題解決的な学習を重視した指導、道徳的行為に関する体験的な学習指導等に向けて益々重要な役割を果たすことになるであろうICTの活用をあげた教員も多くいた。

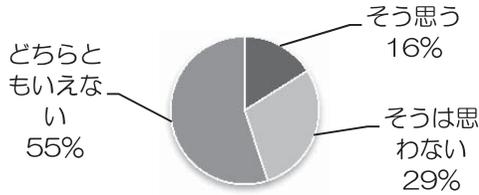
今後、ICTを活用した道徳科の教材教具の開発も大きな課題であると考えられる。

さらに、以下の質問をしたところ結果は次のとおりであった。

「道徳の時間」が「特別の教科 道徳 (道徳科)」に改正されたことで、道徳の授業が充実すると思いますか。

- | | |
|--------------|-----|
| ① そう思う。 | 16% |
| ② そうは思わない。 | 29% |
| ③ どちらともいえない。 | 55% |

「道徳の時間」が「特別の教科道徳（道徳科）」に改正されたことで、道徳の授業が充実すると思いますか。



① そう思う理由（抜粋）を見ると、

- ・目的が今までより明確になると思うから。
- ・生徒が評価されるということで多少変化があると思うし、先生自身が道徳に対してしっかり考えて行うと思うから。
- ・先生方は一所懸命な方が多いから研究を沢山されると思います。
- ・今まで以上に意識して取り組むと考えられるから。
- ・教科となることで指導する教員の意識が変わると思うから。
- ・教科として位置づくことで継続的な指導（繰り返しの指導）が期待され、子どもたちに反映されるのではと思う。
- ・時間数が確保されるため。
- ・指導事項の明確化が実現できるから。
- ・道徳科になることにより、もっと多方面から授業を展開できると思うから。等のように、「特別の教科 道徳（道徳科）」になることにより、授業時数が確保されること、教員や生徒の意識が変化し、継続的な指導や多方面からの授業展開ができるなど、今まで以上に充実すると答えている。

また、②そうは思わない理由（抜粋）を見ると、

- ・教科になるからしっかりやるというものではないと思うから。
- ・教科として考える道徳、議論する道徳に取り組んでも、個人の利害を超えた行動を生むか疑問。

- ・教科書どおりの答えしかできなくなってしまうから。
- ・形だけになり心の深まりが減る恐れがあるから。
- ・実践する教員が「道徳科」のあり方をきちんと理解し活かせないと変わらないと思うから。
- ・その時の生徒の様子でやるべきことを教えていってこそ意味のある道徳であると思うので、全クラスか同じ内容をやる必要がない。
- ・実施する人間、授業時間数が同じであるから劇的には変わらないのでは。
- ・生徒の道徳観は家庭・地域社会（マスコミ、インターネット）などの影響が多く、学校教育だけでは道徳的価値感を育成しづらいため。
- ・評価というものが教師にも生徒にもものしかかるから。等であった。

これらの声に応えるためにも「特別の教科道徳（道徳科）」が実施される平成31年度までの間に、学習指導要領の一部改正に伴う教員の疑問や不安に対する説明会や研修会を開催し、改正の経緯や主旨の理解をより一層深めていくことも、道徳の授業の充実には欠かせない課題であるとする。

5 履修生の声から

教員養成課程における道徳についての課題を「道徳教育論」履修生の講座終了時の感想から考えてみたい。

- ・道徳はどの教科よりも人間を育てるうえで必要な授業なのではないかと思いました。自分の生き方や考え方や人の生き方や考え方の違いや人間として生きていくうえで何が必要なかを考える授業だと分かりました。道徳が特別の教科になることは、どの学校でも等しく道徳の授業をするという面で賛成だが、各先生が意識を持って熱意のある授業をすることが大切だと思う。

- ・ 道徳教育は、とても奥が深くて人間として一番大事なんだと思う。中学の時に道徳の時間をもっと真剣に受けていたら、また違った見方や自分ができていたんじゃないかもしれないと思うと後悔します。今回この授業を受けて自分自身一歩前進できたと思います。
- ・ 道徳心が育っていないと言われる現在の日本を教育の立場から変えるのは道徳教育である。生徒が人の進むべき道を自分で見つけ進んでいけるように手助けすることが必要だ。教師になったら学校生活全ての面で生徒の行動をよく見て時には褒めて時には叱って道徳的実践を促すようにしたいと思う。
- ・ 道徳教育論を受けて、改めて道徳について考えるようになりました。これから成長し社会に出て行く生徒たちに道徳を学ぶことはどれだけ大切なことか。道徳は教える側も学ぶ側もとても難しいと思いますが、道徳をしっかり学び身に付けていくことは社会が変化していつても必要なことだ。学び続けていきたい。
- ・ 私が教師になったら生徒に道徳の授業で扱ったことについて授業後も心に残ってもらえるような授業をしたいと思います。
- ・ これまで私は道徳を軽視していましたが、この授業を通して道徳がいかに生徒に影響を与える大切な時間であるかということを知らされました。生徒の感情の変化や心情を道徳の授業を通して理解できるようになりたいです。
- ・ 私が教師になるころは、道徳の時間が教科になっていると思うので「道徳科」の授業を大事にして、生徒一人ひとりをしっかりと見つめていきたいと思います。等、道徳教育の認識を新たにしている。

このような履修生たちが教員になり道徳教育の充実、推進に取り組んでくれることを期待したい。

同時に、履修生たちが中学生時代に受けてきたであろう道徳の授業や道徳教育の認識が、教員になった時に少なからず再生産される現実が

あることを考えると、教員養成課程では、改正された「特別の教科 道徳 (道徳科)」が目指すものは『よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。』ことであるという目標や「道徳科」の内容、及び内容の取扱い等の理解を授業の中で具体的に深めていくことが重要な課題であると考えます。

また、模擬授業後の履修生の感想から、

- ・ 思いどおりの授業をするためには、相当の準備と時間を費やさなければいけないと感じました。
- ・ 道徳は他の教科と比べ生徒の話聞き考えさせる時間が長いので、しっかりと生徒と向き合っていなければよい授業はできないと思った。模擬授業の経験を活かしていきたい。
- ・ 生徒の心情や考えを引き出せるように工夫した授業を展開したい。
- ・ 発問によっては生徒に伝わらないことがあり成長段階に合わせた授業をしなくてはならないことがわかり、とても難しいことがわかった。
- ・ 生徒が興味を持てたり、自発的に参加していく工夫をもっと見つけたいです。そして、自分自身も生徒と共に考え学べるような授業展開をしていけるようになりたい。
- ・ どんなに想定しても想定しきれないことが授業では必ず起こることがわかりました。もっと経験を積んで生徒の心に響く授業ができる教師になりたいと思いました。
- ・ 生徒の目線と教師の目線は大きく異なるということ。生徒の立場を踏まえた上での授業を心掛けること。生徒の様々な考えや思いを理解し尊重すること。これらのことは、模擬授業に留まらず、以後の教師人生の糧になったと思います。
- ・ 教師の説話により、その授業の生徒に与える

効果は大きく変化する。心に響くありのままの人間の思いを伝えられるとよい。等に見られるように、教員養成課程における実践的な道徳の授業力を育成することも大変重要な課題であるとする。

6 おわりに

ここまで、「道徳教育論」履修生と中学校教員へのアンケート調査等から道徳の授業の充実に向けての課題について述べてきた。

最後に、中学校教員の声の中に

- ・道徳科の評価はどうなるのでしょうか。具体的かつ明確に示してほしい。
- ・評価について具体的な示唆があれば、教員が道徳に対して前向きに取り組めるのではないかと。等、「道徳科」の評価に関するものがあつた。

指導に生かす評価、所謂指導と評価の一体化が言われて久しいが、道徳の授業や道徳教育の評価については、道徳性は生徒の内面的な事柄であり評価はなじまない、評価は慎重であるべきだ等の理由から、必ずしも十分な実践がなされてきたとは言えない。

「特別の教科 道徳（道徳科）」が検定教科書を使用して実施されることとなったが、道徳の授業の充実のために「数値などによらない生徒の成長の様子を把握することを基本とする評価」、「生徒の成長に役立つ評価」はどのようなものなのか、生徒指導要録の改定も視野に、各学校とりわけ授業を担当する教員（学級担任）の理解を深めていけるのかも非常に重要な課題であるとする。